

県南思考 Vol.6

特集：もっと豊かな海へ 結びの対論 亀田県議 × 木下県議



特集：もっと豊かな海へ

三方を海で囲まれた南房総。海は、太古の昔から南房総に住む人々の心にいやしを与え、暮らしを支えてきました。黒潮に運ばれてくる豊かな海のめぐみ。ひっきりなしに漁船が入り出す港のにぎわい。漁業は南房総を支える大きな経済の柱です。その漁業をもっと元気にしようと、南房総の海で、アワビ、ヒラメなど多くの魚介類の放流が行われています。稚貝、稚魚を育て、海に放ち、一定期間を経て収穫するシステム。つまり、「獲るだけの海」から「育てる海」へ。今回は、そんな南房総の海と漁業にスポットをあてたレポートをお届けします。

南房総市千倉町・発

「水産総合研究センター」の成果

水産資源の、さらなる有効活用と若い世代のための環境づくり。それが今後の課題でしょうか。

亀田 鴨川や千倉で生まれた私たちにとって漁師さんたちはごく身近な存在で、毎日のように接して暮らしてきたわけですが、それでも彼らは、一見とつきにくい、子どもの目にはおっかない存在として最初は映るんですね。言葉づかいもあらいから。

木下 「何かをしる」というのを「～しなせい」というし、人を呼ぶとき「ぬしら」と言っし(笑)。体つきはごつくて、まっ黒。たしかに子どもの頃は怖かった。でも、つきあっていくと、実にやさしい人たちだということがわかってくる。

亀田 私の記憶で印象深いのは夏の海水浴場の監視ですね。むかしはライフガードなんていませんでしたから、漁師さんたちが子どもが遊ぶのを見守ってくれていた。

木下 そういえば海の家も漁師さんたちがやりましたね。

亀田 近年、漁業をめぐる環境は厳しさを増す一方で、燃料費の高騰があり、後継者不足に悩まされ、あるいは乱獲と、どこも大変だというレポートを目にするのが多かったんですが、今日の鴨川漁協の取材で、活況を呈しているということを知って安心しました。

木下 組合長さんがおっしゃっていましたが、量の確保と南房総ならではの立地ですね。鮮度を保ったまま首都圏の市場、台所へ届けられるというメリットは大きい。むしろ、豊かな漁場が控えているということが前提になるわけで、黒潮の恩恵にあずかっていることを忘れてはなりません。

地元で魚を活用する方法

亀田 実は今日お話を伺いながら、鮮度の高い魚を首都圏へ届けることも大事ですが、もうすこし南房総へ遊びに来た観光客に楽しんでもらえるような展開も必要ではないかと感じました。

木下 おみやげに持ち帰ってもらったり、おいしい料理として食べさせる施設があったり。内房の「ぼんや」なんか、いつもにぎわってますからね。

亀田 アクアラインが800円になって、さらにこれまで夏の間は時間を延長して料金を徴収していた房総スカイラインのシステムが撤廃され、観光客にも歓迎されている。こうした方々が気軽に立ち寄れる「海の幸」スポットの充実には必要ではないでしょうか。

木下 となると、通年でお客を呼ぶ物がほしくなりますね。千倉のあわびは首都圏での知名度も高く、人気商品となりましたが、なんといっても漁の期間が4ヶ月しかないというハンデがある。

亀田 それは鴨川も一緒です。鴨川ではハマグリが有名ですが、これも漁の期間は限定されている。その意味で、水産総合研究センターに研究を進めていただいて、もっと豊かな漁場を作ると同時に、何か新しい南房総ならではのブランドを作っていく必要もある。研究の一環として、魚を原材料とした商品開発のサンプルをいくつか見せていただきましたが、あれなども、地元の食品メーカーや観光協会などを巻き込んでダイナミックな開発に向けていく必要があるかもしれません。

木下 いまや日本全体で水揚げされる水産物の中でかなりのパーセンテージを、放流された魚や貝が占めている。わが国の水産業を支えていると聞いていいはずで、センターはその研究・開発の、県内では唯一とっていい機関なわけですから、今後も商品開発を含め、リードしていても構いません。

亀田 それにしても、今日お目にかかった海女さんたちといい、子どもの頃から近づきあいをしてきた漁師さんたちといい、海で生きる人たちというのは、どうして皆、あのようにおらかな人が多いのでしょうか。

木下 あ、あけっ広げといいますか、人と人との間に垣根を作らないキャラクターは魅力ですね。あまりにもどりの人との距離がないもんだから、首都圏から移住してきた人なんかは最初のうちはとまどうらしい(笑)。でも、すぐに魅了されるはずですよ。

亀田 よく「戸板一枚下は地獄」といいますが、いったん海へ出れば、同じ船という運命共同体を生きているわけですから、彼らの絆は、その強さが違う。

木下 生きるも死ぬも、生活のすべてで共有しているという連帯感がある人間関係を作るわけだし、そこからうまれる気風のようなものが人を魅了するんでしょうね。

亀田 そういえば、若い人たちが漁師のなり手が増えているというの、いいニュースでした。

木下 第一次産業のなり手が増えているというのは希望が持てますね。

亀田 都会で、パソコンの前に坐りつめて人間関係に苦しみながら働くより、海へ出て自然を相手に汗を流して、夜は酒でも酌み交わしている方がよほど健康的な暮らしといえる。

木下 その意味でも、単に水揚げを増やすだけでなく、もっとも職業として生活が成り立っているようにしていくなど、漁業という産業の底上げを図っていくことが今後の課題でしょうね。



木下 敬二 (きしたけいじ)
南房総市・安房郡選出
昭和23年5月17日生まれ
事務所 / 〒295-0005
南房総市千倉町牧田 164-1
TEL : 0470-44-4111
FAX : 0470-44-4112
http://kishita.awa.jp/
e-mail : kishita@awa.or.jp

県南思考 Vol.6
発行 : 2010年8月14日
制作 : 「県南思考」制作委員会
編集 : 式守編集工房
デザイン : 野村友紀
南の風を県政に。南房総選出の県民による「県南思考」は市民の皆さまとともに、県南のあるべき姿を追い求めていきます。本紙をお読みになった感想、ご要望、その他ご意見は各県議の事務所までお気軽にお寄せください。



亀田 郁夫 (かめだいくお)
鴨川市選出
昭和27年2月16日生まれ
事務所 / 〒296-0041
鴨川市東町 665
TEL : 04-7099-0190
FAX : 04-7099-0191
http://www.kameda190.com/
e-mail : ikuo-k@leaf.ocn.ne.jp

ない。ひどい年は、何日と数えるほどしか出られないこともあったよ。だから漁へ出て、もぐって、大きなのを見つけたときの喜びは格別だ」

と、顔をほころばせます。海女さんたちはそれぞれに自分のポイントをおさえていて、腕のいい人だと一日の



室内のタンクでは「幻のアワビ」といわれる「マタカ」種の育成に取り組んでいる

漁で磯桶いっぱいのアワビをとることも少なくありません。

地域によって異なりますが、収穫されるアワビ全体に占める放流アワビの率は10～40%程度（水産総合研究センター調査）。つまり100個収穫したアワビの内、放流したものが10～40個ほどふくまれる計算になります。「アワビ以外にも、マダイ、ヒラメ、クロダイ、マコガレイなどの稚魚を育成し、放流しています。天然と放流とは、微妙に魚の形状が違うので、水揚げされた魚を見れば正確に区別できるんですが、東安房地区の場合、例えばマダイでは水揚げの40%前後、ヒラメでは15%程度を放流ものが占めるようになりました」と、田中センター長

単純に考えれば、もしも放流がなければ水揚げがそれだけ減っていることになる計算。

水産総合センターの研究業務は南房総の漁業をしっかりと支えていると言ってお間違いのないようです。

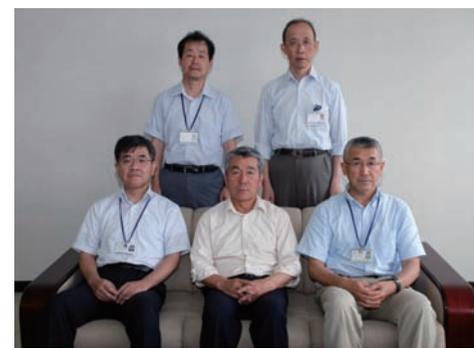


●千葉県水産総合研究センター
〒295-0024 南房総市千倉町平磯 2942
0470-43-1111
ホームページは [「千葉県水産総合研究センター」](#) 検索

全国有数の水産県である千葉県の水産研究施設として総合的な役割を果たしている。海面温度や風潮に関する海の情報収集、海洋生物の調査など研究は多岐にわたる。アワビの放流種苗を県内に供給するほか、平目や鯛、マコガレイなど魚介類の種苗生産能力を入れている。見学可。問い合わせは上記へ。



「育てる」がキーワード。 多彩な研究・開発で 力強く南房総の漁業を支える。



千葉県水産総合研究センターの（前列右から）柴田輝和さん、田中種雄センター長、藤越和信さん、（後列右から）瀧口明秀さん、式田正彦さん

圧倒的な数で広がるコンクリート製の屋外水槽。

それぞれのマスには、500円玉ほどのサイズに成長し出荷を待つばかりとなったアワビの稚貝が育成され、生まれて半年あまりの小型貝を含めると、合わせて170万個ものアワビが飼育されています。

南房総市千倉にある千葉県水産総合研究センター。「当センターの業務は名前が示す通り、海水や海洋資源の情報収集、生態の調査、漁具や水産加工品の開発など、水産に関する総合的な研究ですが、その重要な柱のひとつに、さまざまな魚や貝類の栽培漁業に関する研究があるんです」と、田中センター長。

稚貝、稚魚を育成し、放流、養殖する栽培漁業。その生産技術の開発や管理方法の研究に取り組んでいます。

研究がスタートしたのは昭和40年代に入ってからと歴史は古く、それまで、ただ海へ入って魚や貝をとっていた「収穫型の漁業」から、育てる海、つまり「栽培型漁業」への転換がきっかけでした。

現在、アワビに関して言えば、実際の作業は千葉県水産振興公社へ移行しています

が、新種の開発、栽培技術の改良などの活動でしっかりと種苗育成をサポートしています。

育てて収穫するまで ほぼ4年かかるアワビ

アワビの稚貝育成は、秋が深まって野山が色づく頃に始まります。

海でとってきた母貝を水槽で育て、オストメスを掛け合わせると、やがて200ミクロン、すなわち0.2ミリという専門家がようやく肉眼で識別できるほどの小さな赤ん坊が誕生します。

年を越し、春になると小指の先ほどに成長し、屋外水槽に移して、さらに一年。ようやく出荷できるサイズになります。

「むずかしいのはエサやりでしょうか。ごく小さなときは珪藻（けいそう）といって、藻を食べて育ちますが、天然のアワビだと、その後はアラメ、カジメといった海藻を食べて育つんですね。ただ、それだけの量を確保するのがむずかしい。そこで、代わりに、アワビが好んで食べて、栄養価の高い人工飼料を与えています」

無事に成長したアワビは各漁協からのリクエストに応じて出荷され、南房総では、

主に夏に放流されます。

船上から海にまいてしまうのが最も簡単な方法ですが、海底に着地した際、身が上になって外敵に攻撃されるなどの被害が考えられるため、ひとつずつ海女さんたちの手によって海底に置かれ、あるいはブロックにおさめて海の中へ。

昨年のデータによると、白浜、千倉、和田、鴨川など東安房地区で放流されたアワビの稚貝は76万4000個。これだけの膨大な数が、ほぼ毎年のように、南房総の海の底に放流されています。

こうして手のかかった方法で海に放流して3年から4年。

県で決めた12センチという規定サイズにようやく育ち、海女さんたちの手によって収穫されるのです。



千倉の現役海女さんたち。（右から）新藤さん、栗原さん、山口さん、山口（敏）さん

もしも放流される魚介が なかったとしたら

水産総合センターにほど近い千倉の白間津漁港。

港の一角に設けられた海女小屋では、4人の現役海女さんたちが漁具の点検に余念がありません。

15～6歳の頃からもぐり始めて、もう半世紀以上。

「漁の期間は5月1日から9月5日までのわずか4ヶ月程度。その期間中でも毎日もぐれるわけじゃない。海がしけたら船が出せ

Pin Point インタビュー

鴨川漁協におたずねします。

魚の水揚げは伸びているのか、次世代を担う若い漁師は育っているのか。海のこと、漁のこと。気になる疑問を鴨川市漁業協同組合にぶつけてみました。



鴨川市漁業協同組合の事務所で（左から）亀田、木下両県議と、お話を伺った原智之参事、松本ぬい子組合長

近年の南房総の水揚げ高に 変化はあるのでしょうか。

他の漁協について正確なことはわかりませんが、鴨川漁協に関していえば、安定的な漁獲高を確保しています。鴨川の場合は、いろいろな獲り方ができるのが好結果を生んでいるようです。まず定置網があるし、まき網漁があるし、小型船、掛け網。むろん海女さんたちによる漁もある。さまざまな方法で魚を獲るので種類も多いし、絶対量も多く、結果的に安定的な数字につながっています。もうひとつ、地の利も欠かさない。やはり魚は鮮度が命です。鴨川の魚は人気があります。首都圏という巨大なマーケットを控えて、獲れたての魚をすぐに届けられることができるのは大きいですね。ただ、さらに安定させるために除菌海水を利用したり、「船上活きメサバ」のように商品の差別化を図って、徐々にですがブランド化を進めています。

港や市場に活気があって、 若い漁師さんも増えているようですが。

それも、背景には定置網やまき網といった鴨川の漁法があります。たとえば小型船なんかだと、船を買って網を用意してエンジンをつけてと、ずいぶんと設備投資をしなければ漁に出られない。その点、まき網や定置網では身ひとつで明日からでも漁師になれる。船主さんが人手を探していて、たまたま若い人が仕事を探していたら「じゃあうちに来たら」と、気軽に実現するんです。ですから多いですよ、ホテルマンだった人や、学校の先生をやめて漁師になる人が。朝は早いですが、時化なら休みで時間も自由になる。ある程度の固定給がもらえるし、水揚げによっては歩合も入るので、その辺も魅力なのではないでしょうか。

「育てる漁業」に対する 取組みを教えてください。

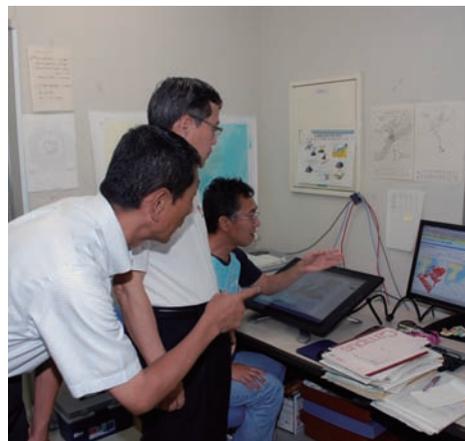
放流しなければ漁獲高が減ってしまう可能性がありますので、鴨川も積極的に取り組んでいます。アワビはもちろん、ヒラメ、真鯛など種類はいろいろです。よく、一般の方に「稚魚なんか放流して、海に囲いがあるわけじゃなし、どこかよそへ泳いでいっ

てしまうのではないかと指摘されることもあるんですが、私たちは、もう少し大きな目で見ていますね。ここで放流した魚が別の場所で揚がったっていうんです。逆に、日本海で放流した魚が鴨川の定置網にかかるとあってあるんですから。つまり、鴨川、南房総といった狭い範囲で考えるのではなくて、日本全体で海の資源が増え、安定した漁獲高が確保できればいい。それが稚貝、稚魚放流の目的なんですよ。

●主な魚介の漁獲量と放流数 (千葉県全域/2009年)

種類	漁獲量	放流数
マコガレイ類	363トン	503,000尾
クロダイ類	54トン	249,000尾
マダイ	144トン	490,000尾
ヒラメ	310トン	1,189,000尾
アワビ	79トン	1,632,000尾
クルマエビ	1トン	4,120,000尾

※データは千葉県漁業資源課/千葉県農林水産統計の各資料による。



調査船「ふさみ丸」。もう1艘の「千葉丸」と海洋のさまざまな情報を収集し、センターのコンピュータルームで分析。データは各漁協などへフィードバックされている